



羅針盤



多田 弥生
Yayoi Tada

帝京大学医学部皮膚科学講座 教授

妊婦さん、妊娠を考えているすべての女性のためにできること

普通の皮膚疾患が妊婦に生じると、とたんにむずかしく感じられる。まず、妊娠するとホルモン、体型、免疫、血流などにさまざまな変化が生じ、皮膚の変化につながることを念頭に置く必要がある。例えば、妊婦で痒痒がしばしば出現するが、妊婦特有の痒痒を伴う疾患か、であれば、ホルモンによるものか、免疫によるものか、妊娠に伴う体型の変化によるものかなどを考えて診断、治療に繋げる必要がでてくる。臨床的に診断がむずかしく、生検をしようと思っても、局所麻酔やメスによる侵襲が母体に与える影響と生検によって確定診断をつけるメリットを天秤にかける必要がある。

診断がついたとして、次は治療である。強いランクのステロイドを使えば炎症や痒痒改善につながるのわかるが、経皮吸収される分を考えたとき、どの程度の量まで使用が許されるか、胎児への影響はどうなのか、を考えなければならない。内服薬を使おうと思って添付文書を見ると使用可能であってもおおむね「妊婦への安全性は確立されておらず、リスクベネフィットを勘案して使用」と記載されており、必要とは思っていても、そこまでのベネフィットがあるのか、自信がなくなる。ましてや最近までのシクロスポリンのように、海外では妊婦に使用可能であっても、国内の添付文書に「妊婦には投与禁忌」と記載されていると、倫理委員会の許可が必要に

なる(2018年7月、シクロスポリンの添付文書の改訂が行われ、投与禁忌対象から妊婦または妊娠している可能性のある婦人がはずれた)。使用を決めた場合にも、内服薬投与の可否について母体、とくに胎児をトータルに管理している産婦人科担当医の了解を得る必要がある。

将来の妊娠に備える場合も同様のむずかしさがある。免疫抑制薬などの治療を必要としている女性患者が将来妊娠希望である場合には、すべての可能性を考えて準備しなくてはならなくなり、何か準備し忘れたことはないか、この疾患特有の落とし穴はないのかと不安になる。

しかし、もっとも不安なのは患者である妊婦、あるいは妊娠を考えている女性患者自身である。「皮膚のことはお任せください。お子さんを無事に産むことだけに専念してくださいね」と言えるように、こちらも普段から妊婦に生じうる皮膚疾患と妊婦に「やっていいこと、いけないこと」を知っておく必要がある。

今回は妊婦に関連してさまざまな側面からの経験、知識を持っている先生方をお願いし、執筆していただいた。お忙しい中、素晴らしい原稿を作成いただき、心より感謝申し上げたい。皮膚病でお悩みの妊婦さんが外来にいらしたとき「これ、知ってる!」と自信をもって診療していただける一助となれば、幸いである。